



松原病院とびうめ館が新築され今年で5年が経ちました。私たちはとびうめ館で高齢者医療を中心に行ってきましたが、この機会にもう一度とびうめ館の役割について考えてみたいと思います。

現在、日本の65歳以上の高齢者人口は約2400万人で、このうちの約6〜7%の160万人に認知症がみられると言われています。このような多数の患者のみられる認知症とは、一体どのような病気なのでしょう。

認知症の代表的疾患であるアルツハイマー型認知症について考えてみましょう。アルツハイマー型認知症では頭部MRIを撮影してみると、まず目を引くのは「脳の萎縮」と言われる、脳の容量がすっかり減って薄くなっってしまった状態です。これは脳細胞が死滅して抜け落ちてしまったことにより生じます。つまりアルツハイマー型認知症は、身体の司令塔である脳がやられてしまう病気です。この結果、この病気にかかると少しずつ生きていくための機能が損なわれていきます。

アルツハイマー型認知症の初期症状は物忘れですが、そのうちに自分の置かれている状況を把握する力＝見当識と呼ばれる機能が障害されてくるようになります。見当識が障害されると、「今、自分がどこにいるのか」「今日は何月何日なのか」といったごく簡単なことがわからなくなります。

さらに進んで中期には、無意識に行っていた簡単な動作の手順がわからなくなってきました。例えば洋服を着替えるとか、お茶を入れるとか、お風呂に入るとか、そういった誰に改めて習ったわけでもない動作の順番を忘れてしまい、どうやっていいかわからなくなるので、パンツを2枚はいたり、毎日同じものを着続けたり、長期間お風呂に入らなったり、といったような行動が現れたりするようになります。またこの時期には、かなり病気が進んだせいで「何だかわからないけど、色々おかし」と漠然とした不安感を抱くようになり、こうした不安感から「徘徊」「もの盗られ妄想」「大声で叫ぶ」などの行動障害がみられるようになることもあります。

さらに進むと終末期には、生命維持に関わる大事な基本的機能＝自分の意思を示して「痛い」「寒い」と知らせたりすることや、話すこと、立って歩くこと、食べることなどができなくなってしまうます。そして無言、無反応で、ただ息をしているだけの植物のような状態となってしまいます。アルツハイマー型認知症だけで命を落とすことはありませんが、食べない、自分の身を守る手段をとれない、清潔を保てないなどのことから、低栄養状態、免疫低下状態に陥っていることが多く、高率に感染症を合併し、さらにその感染症から死亡に至るケースが多くなります。

の中期にあり行動障害で大きな問題を抱えている方に対して専門的な治療を行っています。

とびうめ3階では、精神症状の比較的安定した、慢性期の医療と介護が必要な高齢者の対応に取り組んでいます。

とびうめ4階と内科病棟は身体合併症治療病棟です。高齢者では1人で多数の病気を抱えていることが多いのですが、このような病気の治療を行っています。認知症の終末期で食べられなくなった症例に胃ろうを増設を行うったり、点滴栄養の管理を行ったりしています。最後の看取りも大切な仕事と考えています。

このようにとびうめ館では、認知症の患者さまを早期から終末期まで各期や状況に応じた対応ができることを目標としています。

認知症の医療に携わる者として、「もし私が認知症になっちゃったら...」「旅立ちは...」などと考えたりしている今日この頃です。認知症の患者さまとそのご家族、関わる方々の大切な「時」を「支えたい」「支える」とは「いつも考えております」。

目次

vol. 4
2007.8月

認知症を支える
・・・とびうめ館

医療法人財団松原愛育会 松原病院
内科医長 中本 理和

..... 2-3

日本医療評価機構認定
を受けました

..... 4

ピアサポートいしびきの新事業

..... 5

能登半島地震

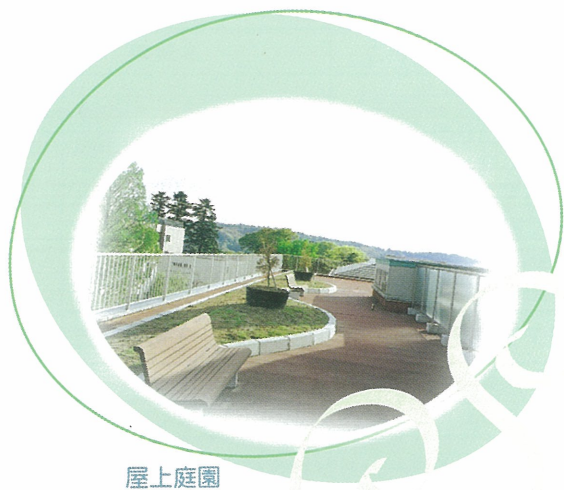
こころの処方箋

..... 6

地域連携室 NEWS

feature KANAZAWA

..... 7



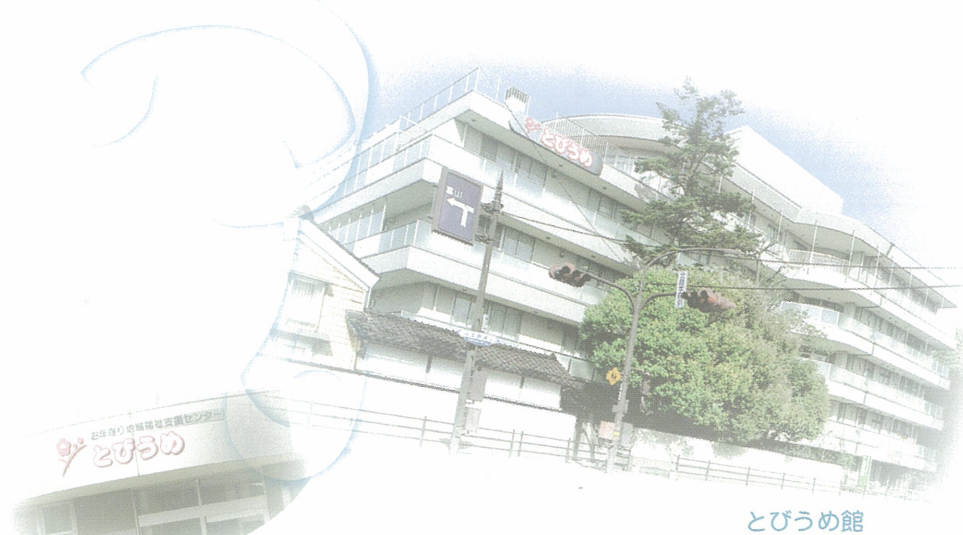
屋上庭園



デイケアすまいる



とびうめ蔵



とびうめ館